

「全員参加の

草の根運動」を

目指して

中央聖書神学校 校長

三宅 規之さん

2020年に創立70周年を迎えた日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団立の中央聖書神学校（東京・駒込）が2021年4月より新しく基礎・専門課程をスタートし、本科基礎課程4名、通信科基礎課程34名、通信科伝道者コース編入1名、通信科基礎課程編入7名の合計46名が入学した。ペンテコステ派の神学校として多くの牧師・宣教師を輩出してきた同校が、この時期に新たな制度を導入した理由などを三宅規之校長に聞いた。（聞き手・谷口和一郎）

——今年から新しい課程が導入されたわけですが、まずは、これまでどのような教育課程だったのかを教えてください。

三宅 歴史的なものからお話しすると、私たちの中央聖書神学校（以下、CBC）は、中央聖書学校という名前前で1950年に開校しました。初代の校長は、教団総理も務めた弓山喜代馬先生ですね。そこからずっと、基本的に入寮して共同生活をしながら牧師や宣教師になるための学びを積んでいくという形でした。いわゆる本科のみですね。最も卒業生が多かったのが第14回卒業（1964年）の24名ですが、これまでに700名近くの卒業生を送り出してきました。そこから2008年に、本科とは別に通信科を開設しました。

また、2005年からは、ろう者の伝道者養成のためのろう者聖書学校を再開し、これは今も継続しています。

——それがどのように変わったのでしょうか。

三宅 本科、通信科ともに「基礎課程」と「専門課程」を新設し、「基礎課程」を終えてから「専門課程」に進むという形にしました。本科は対面式の授業を受けて、寮に入って共同生活をしながら学びます。通信科はオンラインですから、日本中どこでも、また海外にいても学べます。基礎課程とは、いわゆる信徒奉仕者コースで、32単位で修了。本科だと1年でこれを学びますが、通信科だと1年半から2年を想定しています。基礎課程を終えて、牧師・伝道師になりたい人、神に召されていると受け止めた人は、

それぞれ専門課程に進むことができます。その場合、進級審査があつて、そこでもいわゆる「召し」の確認なども行います。教師としても、1年間はその学生の成績、霊的状态、適性などを観察できるわけで、以前よりも慎重に判断できると言えます。また、基礎課程を終えた学生は、一旦、教会の奉仕者に戻っても、5年内であれば専門課程から再スタートすることが可能です。

——つまり、本科の場合、これまでは入学時に「召し」の確認をしていたのを、まずは入学してもらって、2年次にそれを行うということですね。学びのための門戸を広げたということでしょうか。

三宅 やはり、すそ野を広げると言いますか、牧師や伝道師になるかどうかは分からなくても、主のためになんかをしたい、聖書全体を学びたいという人は多くいると思います。そんな方々に、まずは学びの中に入ってもらい、学びの中で改めて主の召しを確認していくということですね。入学試



中央聖書神学校のキャンパス

験も、今までは聖書知識や英語の筆記試験があったのですが、それもなくなり、面接と作文、牧師の推薦状だけとなりました。

CBCは昨年、創立70周年を迎えましたが、もう一度ペンテコステ運動の原点とは何かと考えたときに、私は「全員参加の草の根運動」だと思うのです。「神の霊に満たされた者は誰でも神のことは語る」という

単純で力強い信仰がペンテコステ運動の原点だと。ですから、牧師・伝道師への献身に限定せず、とにかく神様のために何かがしたいという人を幅広く受け入れるべきだと考えたわけです。またそのことは、日本宣教の鍵だとも思っています。

——それに応答した人が多かったということですね。

三宅 はい。今年はまだ移行期ではありますが、本科基礎課程4名、通信科基礎課程34名、通信科教会献身者コースから通信科伝道者コースへの編入1名、同じく通信科基礎課程への編入7名の合計46名が入学してくれました。

——46名とは多いですね。

ただ本科生が少ないことが気になりますが、何か理由がありますか。貴校ではアッセンブリー以外の教団や教会からも学生を受け入れているわけですが、その内訳も教えてください。

三宅 まず、本科生が少ないのは最近に始まったことではなく、ここ20年ぐらいの傾向です。現在、本科の3年生は4名、2年生は1名、1年生が4名となつて

います。そして、通信科自体は2008年に始まりましたが、オンラインで学ぶというのが世間でも一般化し、CBCの通信科にも多くの学生が与えられてきました。今後も、そういう流れになつていくと思います。

他教団からの入学生については、CBCはこれまで、特にペンテコステ派の教団・教会から多くの学生を受け入れてきました。今年の本科の新入生4名のうち2名がアッセンブリー以外からの入学となつています。通信科でも、どこで調べられたのか分かりませんが、何人もの他教団・教会の学生が応募してきました。私としては、日本のペンテコステ派全体に貢献できるような神学校になれたらと願っていますし、他のペンテコステ派の神学校とも協力体制を作っていきたいです。

——外国籍の学生も多くなつてきましたか。

三宅 最近では日系ブラジル人のアッセンブリーの群れが日本各地に生まれてきて、そこからの学生も来るようになっていきます。今年の本科の新入生4名のうちの2名が教団外からと申し上げましたが、残り2名はアッセンブリーの日系ブラジル人の信徒です。あとは、韓国系、中華系の教会などから入ってくる学生もいますね。

今後の神学校の流れとして私が重視しているのが、オンライン化と国際化です。日本の中で在留外国人が増えるというのは、大きな流れとして今後も続くと思います。その中で、日本の教会がそういう人たちを受け入れることができるかどうか、大きな鍵になると思っています。というのは、第一世代はポルトガル語やタガログ語で礼拝をしていても、日本で生まれた子どもたちは日本語で教育を受け、日本語が日常語になつていきます。そんな時に、親が通う教会で母国語の説教を聞き続けられるかというと、それは難しいでしょう。そういう時に、日本の教会が彼らを受け入れる必要が出てきます。それは、都会だけでなく、地方においても同じです。

CBCとしても、海

外の神学校との交換留学制度などを作っていく予定です。すでに2校からオファーが来ていて、あとはルールを作つて提携するだけになつていきます。これが実現すると、そうした学校の神学生を短期でCBCに迎えて、一緒に寮生活しながら研鑽し合うことができます。また、米国アッセンブリー教団にMAPS（マップス）という短期の宣教師訓練コースがあつて、信徒たちが自分で献金を集めて世界各国に赴き、そこでミニストリーを行つています。こうした方々にも学生たちとの交流やミニストリーの実践を一緒に行つていただければと考えています。

——では、学生の方々が最初に学んでいく基礎課程について伺います。先ほど、いわゆる信徒奉仕者コースだとおっしゃいましたが、信徒として何ができるようになつて欲しいと願つておられますか。

三宅 基礎課程を始めるにあたって打ち出したのは、五つのことができるようにしようということ

みやけ・のりゆき 1965年、大阪市内で開拓伝道をしている牧師夫妻のもとに生まれる。同志社大学神学部を卒業後、時事通信社に9年間勤務。1997年、中央聖書神学校に入学。卒業後の2000年、フィリピンのAsia Pacific Theological Seminary (アジア太平洋神学大学院)に留学。2004年に帰国し、めぐみ福音キリスト教会(東京・荒川区)で教会、主管牧師として現在に至る。2007年から中央聖書神学校で教師を務め、2019年に第6代校長に就任。



本科で行われるチャペルの様子。遠隔の牧師によるオンラインでの説教の際には教室で行われている

す。それは、信徒奉仕者として「証しができるように」「小グループを導けるように」「個人伝道ができるように」「みことばを分かち合えるように」「ペンテコステ信仰を継ぐ者に」の五つ。み

ことばを分かち合うというのは、説教ができるようにということではなく、デイボーションで受けた恵みをも人に分かち合えるように、という意味です。これら五つのことをしっかりと学ん

で、信徒奉仕者として教会で仕えられるようになると、牧師にとっても大きな助けと力になると思います。この五つの目標を具体的に教えるために「ミニストリー概論Ⅰ・Ⅱ」というコースを新たに新設しました。とても実践的な学びとなります。聖書自体の学びとしては新約聖書通論、旧約聖書通論、聖書解釈学、組織神学緒論が各2単位(1単位≒27時間)あり、聖書や神学の概要を学びます。

——今回、かなり大胆な改

革だったように思いますが、反対意見はなかったのでしょうか。また、教団と神学校の関係性の中で、教団としての取り組みも教えてください。

三宅 それが本当にスーッと承認されていきました。CBCの運営委員会と理事会、教団の理事会、そして教団総会と続くのですが、特に大きな反対意見もなく、承認していただきました。やはり皆さんの意識の中に、このままでいいのかという一種の危機感が共有されていたのだと思います。私が校長に就任したの

は2019年のことですが、それからすぐにこのビジョンを掲げて、プロジェクトチームを作り、毎月のミーティングを積み重ねてきました。そのチームには信徒の方もいますので、パンフレットを作る際にも信徒から見てどういう情報が必要だとか、そういう意見はとても参考になりましたね。

また教団としては、昨年の教団総会において「信徒登用の推進」が謳われた項目が承認されました。教団としても、信徒を積極的に用いようという機運が高まっていて、それがCBCの改革とも合致しているのではないかと思います。

——日本アッセンブリー教団は全国に200以上の教会・伝道所がありますね。日本のキリスト教会では無牧や兼牧の教会について、それをどうするかという議論もなされていて、貴教団も例外ではないと思います。「信徒の登用」ということで、地域教会内の働きを充実させていくのか、あるいはそうした無牧の教会への派遣も射程に入っているのか、そのあたりはいか

がでしょうか。

三宅 これから先10年、20年が経たないと、結果は見えてこないように思います。今回、通信科基礎課程の新入生34名のうちの15名が一つの教会からの入学生なんです。そこは信徒教育に熱心に取り組んでいる教会だと思っています。CBCの基礎課程で学ばれた信徒が整えられ、地域教会が成長していくならば、それは素晴らしいことです。しかし、そこから専門課程に進んで牧師になっていく方、または信徒奉仕者として無牧の教会で働きたいという方が出てくるかもしれません。すそ野を広げることで、いろいろな可能性も生まれてくると思うのです。

——専門課程が終われば基本的に牧師・伝道師になっていくわけですが、牧師としての資質、必要条件は何だと思われませんか。

三宅 結局は人間力というか、総合力です。霊性や人格と言ってもいいと思います。その上で、私は牧師の伝道力が極めて重要だと思っています。「教会成長」を考えた場合も、だい

たいは信徒訓練や弟子訓練が言われるわけですが、その前に、牧師自身がしっかりと福音を人々に伝えられるかどうか大切です。そして、福音の伝え方にも二種類あって、一つは説教を通して語る方法、もう一つは個人伝道ですね。その両方において、イエス・キリストを受け入れるお祈りまで導けるかどうかです。

それが一番、日本の牧師にとって必要なところだと思います。伝道説教においても、福音を語って「わかりましたか?」「アーメン!」で終わるのではなく、「では、イエス様を信じたい人はいませんか?」という招きがしっかりとできる。そこを何としても神学校の学びの中で身につけていただきたいのです。

加えて言えば、ペンテコステの教会においては、礼拝で説教が終わった後の時間が大事です。私は神学校で説教を教えているのですが、例えば「イエス様はいやし主です!」「アーメン!」「聖霊のバプテスマは大切です!」「アーメン!」で終わったら駄目だ

と思うのです。そこから前に出てきてもらって、一人ひとりのいやしのために祈る、聖霊に満たされるように祈り導くということです。そういうミニストリーができるかどうかがすごく大事で、そこを何とかできるよ

うになって現場に出てもらいたいという願いがあります。——エペソ書の4章などを見れば、牧師の役割として、信徒たちを整えて建て上げていくということがあると思います。一生を通して信仰生活をしていく中で、どのように長期的な養いを行っていくのか。そのことについてはどう思われますか。

三宅 私は人間の成長には三つの段階、フェーズがあると思っています。第一は、自分を導いてくれるメンターの存在ですね。第二は、共に成長する兄弟姉妹の存在。第三は、自分が関わって成長を助けていける存在。この三つがあつて初めて、人間は総合的な成長ができると思っています。CBCにおいてもメンター制度があつて、本科生は学校

の教師と、通信科生は所属教会の牧師や通信科の教師と、直接あるいはZoomなどをを用いて面談し、霊的状况を分かち合いながら一緒に祈ります。

各個教会においても、そういう三つの交わりが実現できるように、牧師として導いていく必要があるでしょうね。第二の点においては、特に用事がなくても会って話ができるような兄弟姉妹の関係、日ごろから色んなことを語り合えて、共に折り合える関係です。

「先生、相談があるんですけど……」と言ってきた時には、もう手遅れというか、極めて厳しい状況になっていることが多いのです(笑)。だから、そういう信徒同士の小さな交わりや家庭集会、スモールグループをいかにバックアップしていかけるか、それも含めて教会なんだという発想の転換が必要だと思っています。これは他教団の牧師から伺ったことですが、ある牧師が、説教はするんだけど、礼拝が終わった途端、牧師室に閉じこもって出てこない。そして、信徒たちが全

員帰った後に出てくる。そんな牧師がいるんだというお話でした。牧師にとっても、この三つの交わりの中に生きることが大切ですね。——しかし、基礎課程と専門課程の全過程を通信科だけで終える学生もおられますし、お話を伺っていると、その傾向はますます増してくるようになってきます。オンラインの授業だけでは学び切れないものもあるのではないのでしょうか。

三宅 私は1997年にCBCに入學し、寮生活を通して鍛えられた部分があります。「鉄は鉄によつて研がれる。」(箴言27・17)とありますが、まさにそれを体験しました。通信科と言つても、先ほどお話したメンター制度や、スクーリングなど、きめ細かな教育を心がけています。日曜派遣もありますし、通信科独自のインターン制度があつて、無牧の教会に1、3か月派遣します。ですから、実質的には本科とあまり大きな違いはないと思っています。

また、本科と通信科の融

合と言いますか、一緒にできることを増やそうとしていまして、毎年春の「聖別会」を、これまでは本科だけでやっていたのを、今年から一回は神学校のチャペルで本科だけ、あと一回は夜にオンラインを使って全員参加の聖会をするようにしました。コロナ禍の中で今は難しい部分もありますが、泊まり込みのCBCキャンプのようなものも行いたいと考えています。

特に、通信科の学生たちは、地域教会や職場という現場に属しています。そこは、寮生活と異なり、人間関係がより複雑で厳しい状況にあるのかもしれない。だからこそ、献身者としての自分を常に見つめ、主との対話を継続し続ける必要があります。神学を学ぶことに大きな意味があるのだと思うのです。

——コロナ禍の時代に新しい課程がスタートしたというのは、何か不思議な気がします。5年後10年後が楽しみです。今日は、多くのことを語っていただき、ありがとうございました。